

第 132 回 Brown Bag Lunch 報告書

テーマ：グレンイーグルズ・サミットにおける開発問題

講師：佐渡島志郎氏／外務省経済協力局参事官

日時：2005 年 7 月 25 日（月） 12:30-14:00

佐渡島志郎外務省経済協力局参事官より、グレンイーグルズ・サミットにおける開発問題につき、ご講話いただいた。講話の要点は以下の通りであった。

1. グレンイーグルズ・サミットまでのプロセス

- 今回のサミットの議長国はイギリスだったが、イギリスは、かなり前からサミットのテーマとして「アフリカと気候変動」を明確に打ち出していた。イギリスは、さまざまなリソースを導入し、アフリカ開発の議論を盛り上げてきた。ゆえに、非常に珍しいサミットのプロセスだった。

2. 日本にとってのアフリカ開発問題

- 日本は、アフリカに対しては、最高の頃で ODA 全体の 10 数%、昨今では 7～8%配分している。現在は、8 億ドル前後のレベルにとどまっている。アフリカに対する ODA 額は年々減少している。
- 日本にとって、アフリカの開発に対する取り組みはチャレンジである。予算は下降線を辿り、人手的にも薄い。しかし、93 年以来、TICAD プロセスを組織して、アフリカ諸国との議論を積み重ねてきた実績がある。今、TICAD III まで来ている。昨年 11 月に、TICAD プロセスの下で、貿易・投資に焦点を当てた会議を招集したところ、かなりの国が相当ハイレベルのミッションを送り込んできた。このことは、TICAD プロセスを通じて日本が積み重ねてきた主張が、アフリカのパートナーの人たちに長い年月をかけてしみ込んできた表れだと思う。

3. グレンイーグルズ・サミットにおけるアフリカ開発問題に対する日本の姿勢

- TICAD での議論を基に我々が得た答えである、それほどお金はないのでインテレクチャルな部分での協力を強化するという方針を、G8 の議論の中でも打ち立てて、少なくとも G8 の一つの合意にまで持っていこうとした。
- サミットでは『アフリカ文書』が発表されたが、そこには半年から 1 年近く G8 が重ねてきた議論が凝縮されている。昨年秋の段階からの我々の戦術は、この G8 の議論の中に TICAD プロセスの中で積み重ねられた議論を、他の柱と並んではめ込んでいく、組み込んでいくことだった。できあがった G8 の合

意文書を実施してみて、はっと気がつくとは実は TICAD だったというところに持っていければと、我々は考えていた。

4. TICAD プロセスにおける 4 つの旗

- TICAD プロセスにおいて立てられている大きな旗は、平和の定着、農業、貿易、キャパシティ、である。
- 農業について、アフリカに関する議論を振り返ってみると、農業の分野に関して正面から議論されたことはあまりない。非常に不思議である。世界のバイラテラルなドナーが農業の分野でどのくらいやっているかを今回調べてみたら、日本が全世界の 4 割を占めている。アフリカのサブサハラについてみても、日本が一番大きく 15% ぐらいを占めている。フランスやイギリスはそれに続いて 10% ぐらいである。
- アフリカの開発問題を議論するには、サプライサイドに注目すべきだと思われる。お腹の空いている人に食事を与え、借金を帳消しにし、病人に薬を与えるといった、短期的なディマンドサイドに応じるだけではない。サプライサイドの能力を少しずつビルドアップしていったこそ、発展の基盤ができていくのではないか。アフリカでは 7 割の人口が農村にいる。ゆえに、農業の議論はとても重要である。
- 貿易について、東アジアの場合は、貿易総量の 1960 年以來の成長の奇跡を辿ってみると、経済の成長と同じようなパターンで貿易が伸びてきていて、総貿易の半分ぐらいの角度で域内貿易が伸びてきている。一方、アフリカの場合は、貿易総量が経済の動向とは無関係と言えるぐらい、同じレベルで推移している。また、アフリカの域内貿易を 1960 年代から辿ってみると、ほとんど 0 である。アフリカ諸国の政策を調べてみると、域内貿易の奨励は含まれていない。ゆえに、政策のオリエンテーションを変えていかなくてはならないと思う。
- キャパシティの問題については、2 つの側面がある。サービスのデリバリーをきちんと最後までやるということ、そして、それぞれのエンパワーメントがないと物事が始まらないということ、である。これらの諸点は、サミットで発表された『アフリカ文書』の中にも入れることができた。その意味ではかなり苦労したが、出発のコンセプトを G8 の中できちんと共有できたと思う。

5. アフリカ諸国の日本に対する期待

- 昨年の TICAD にあれだけの人が集まったということは、アフリカのパートナーの人たちの視界の端に東アジアが映っていて、東アジアのようになりたいと考えていることの表れだと思う。日本はもともと東アジアの一員としてや

ってきたので、東アジアの真打ち登場の声が上がっているのだと思う。我々はそれに応えていかななくてはならない。ODA 大綱の通り、アジア重視の姿勢に変わりはないが、アフリカにおいても相当まじめに取り組んで、インパクトのある仕事をしていかななくてはならない。

6. 『アフリカ文書』の実施

- 『アフリカ文書』に盛り込まれているコンセプトをどのように All Japan でやっていくか、どのようにアフリカのパートナーと一緒にあって、実際に現場でプロジェクトやプログラムに変えていくか、問題意識、危機意識として強いものを持っている。インパクトを与えるためには、大急ぎでいろいろなことをやらなくてはならない。

7. 2008 年のサミット開催に向けての日本の課題

- 2008 年、日本はサミットの議長国になる。TICADIV も 2008 年に開催される。イギリスの ODI (Overseas Development Institute) の論文でも触れていたが、日本は 2 年後、過去 1 年間イギリスが置かれてきた立場に追い込まれることになる。その時、サミットの準備がどのくらいできているか、物事が走り始めているかが問われることになる。それまでに我々に残された時間はあまりない。最低限やらなくてはならないのは、次の 4 つである。

(1) アフリカ諸国との対話

特に、NEPAD を組織している国々との対話が重要である。意識的に、いろいろなレベルを通じて、ビジョンを共通にしていく必要がある。

(2) G8 のアフリカ開発問題に関する議論を継続させる

来年のサミットの議長国はロシアであるが、あまり開発問題に熱心でない可能性がある。しかし、3 年後のサミットの議論につなげていくためには、G8 の中で開発に関する議論を継続していく必要がある。

(3) デリバリーをきちんと行う

(4) アフリカ向けの援助の倍増

日本は、アフリカ向けの援助を倍増すると、今期のサミットで表明した。これは 7~8 年前のレベルに戻すということである。他方、アフリカ向けを含め ODA 全体として、2004 年の援助実績額をベースに、今後 5 年間をかけて 100 億ドルを積み上げると公約した。